

## 災害福祉からみる地域活性化の手がかり

八尋 茂樹\*

新見公立短期大学幼児教育学科

(2015年11月18日受理)

筆者は2011年9月より東日本大震災復興支援活動を開始し、以来2015年9月までの4年間、全国各地の災害支援活動をおこなってきた。そして、その4年間のボランティア活動を通して、更地と化した町の復興する様子や、そこで懸命に支援活動をする人たちの姿勢、さらには、復興地を中心に日本全国の人々が繋がっていく様子を観察すると、全国で掲げられている「地域創生」や「地域活性化」の手がかりがそこに存在するようになるようになった。本稿では、筆者の4年間の災害福祉的活動を整理して報告すると同時に、その活動から見える地域活性化のための手がかりについての初歩的な考察をおこなった。その結果、魅力的な町作りに最も必要なことは、他所からの訪問者に感動を与えて帰っていただけるような心からの歓迎と、それを実践できる魅力的な人々が町に住むことであると考えた。

(キーワード) 災害福祉, 地域活性化, 魅力的な町作り

### I. 本報告における災害福祉的支援活動の具体的内容

筆者の災害福祉<sup>1)</sup>的な支援活動は、A. 現地支援方式、B. 寄付支援方式の2種類に大きく分類される。以下、筆者が実践してきた具体的な活動内容を報告する。

#### A. 現地支援方式

筆者は、表1に示した7つの災害において、主に被災地の社会福祉協議会主導による復興支援ボランティア活動に参加した。例えば、浸水して生活できなくなった家屋からの家財道具の搬出、泥かき及び土嚢袋への詰め込み、消石灰散布、床拭き等を中心におこなった。災害から2年以上経過している地域では、傾聴ボランティアや高齢の被災者のお手伝い等が活動の中心となった。

表1 現地支援方式の活動例

	復興支援活動対象災害	活動期間	回数
1	東日本大震災	2011年～	23回
2	山口県・島根県豪雨災害	2013年～	10回
3	南陽市豪雨災害	2013年～	1回
4	丹波市豪雨災害	2014年	4回
5	福知山市豪雨災害	2014年	2回
6	広島市土砂災害	2014年～	8回
7	北関東・東北豪雨災害	2015年	1回

#### B. 寄付支援方式

筆者は、2011年から2015年まで、東日本大震災の被災地支援として、募金活動を企画して日本赤十字社等に寄付金を譲渡したり、市民から未使用のタオル等の寄付を募り、集まった物資を被災地の社会福祉法人等に譲渡する支援活動をおこなったりした。また、通常の募金活動の他、被災地支援グッズを製作、販売し、その売上を寄付する企画も実践した。筆者がおこなった寄付支援方式の活動は表2の通りである。

表2 寄付支援方式の活動例

	支援活動名	活動期間	回数
1	チャリティTシャツ大作戦 <sup>2)</sup>	2011年～	4回
2	シリコンバンド大作戦 <sup>3)</sup>	2013年～	8回
3	暖かい靴下を送ろう計画 <sup>4)</sup>	2013年～	2回
4	カレーライス大作戦 <sup>5)</sup>	2014年	1回
5	ステッカー・缶バッジ募金 <sup>6)</sup>	2014年～	2回
6	えんぴつ募金 <sup>7)</sup>	2014年～	2回
7	青い鯉のぼりプロジェクト <sup>8)</sup>	2014年～	2回
8	七夕大作戦 <sup>9)</sup>	2014年～	2回
9	駄菓子大作戦 <sup>10)</sup>	2014年	1回
10	30t project <sup>11)</sup>	2014年	1回
11	ネパール中部地震募金 <sup>12)</sup>	2015年	1回
12	ニコニコ東北大作戦 <sup>13)</sup>	2015年	1回
13	豪雨災害タオル大作戦 <sup>14)</sup>	2015年	1回
14	東日本豪雨災害募金 <sup>15)</sup>	2015年	2回

\*連絡先：八尋茂樹 新見公立短期大学幼児教育学科 718-8585 新見市西方1263-2

## II. 考察

### 1. 支援する側（支援者側）に見えた可能性

企業がおこなう社会貢献活動は、貢献そのものの価値の他、企業イメージや信用力、そして、社会からの認知度の向上において価値のあるものと認識されており、行政も社会貢献活動を実践する企業を支援する体制をとるようになった<sup>16)</sup>。同様に、日本各地で頻発している災害に対し、我々が現地へ駆けつけて汗を流して活動することは、多くの人たちから頼もしく思われ、また、社会的な信頼を得ていくきっかけとなる。例えば、東日本大震災発生当初、筆者が製作した本学の名前入りのチャリティTシャツ（図1）は1枚も売れなかった。しかし、復興支援活動を継続することによって、被災地の人々に貢献しながら、同時に筆者の所属する大学や新見市に対して良いイメージを徐々に持っていただき、2015年9月現在、チャリティTシャツを314枚売ることができた。このような認知度と信頼度の向上による効果は、表2の寄付支援活動において多くの方々の理解と協力を繋がった。

また、力強い活動が他者に活力を与え、「私も誰かのために頑張ってみよう」という意識の変化に影響することもある。筆者が立ち上げたボランティアチームは2名のメンバーで活動が始まったが、4年間で参加希望者は増え、27名になった。あるいは、「地元のボランティアチームに所属するきっかけをいただきました」という報告を受けたこともあった。



図1 大学名の入ったチャリティTシャツ

一方で、自身の生活の事情から、誰もがボランティア活動に積極的に参加できるわけではない。体力に不安があったり、被災地まで行くお金が無かったり、汗を流すほどの活動をする勇気が無かったりと、様々な理由から多くの人が支援活動に参加していない。しかし、多少の

寄付ならば貢献できると考える人も多い。筆者が展開した14の寄付支援活動のほとんどが、そのような人々の気持ちの受け皿となっているとの賛同の意見を協力者よりいただいた。そして、「世の中で起こっている大災害に無関心ではなく、自分も支援活動に参加できているのだという実感が得られ、大変感謝している」という意見も得られた。また、筆者は寄付支援活動の協力者全員に対し、可能な限りの誠意を持って接するよう心がけ、時間がかかっても手書きでお礼状を作成し、そこにはひとりひとりの名前も添えた。山崎（1994）は、人による手書きの文字から、その文字や文書の持つ本来の内容や意味を越えた情感（感性情報）を読み取るものだと述べている。ワープロやインターネット全盛の時代だからこそ、手書きの手紙こそ、相手の心に直接的に感謝の気持ちを伝えられる手段であると考えた。そして、その手紙を受け取った人の中には、「自分の部屋の壁に貼りつけて、苦しい時に眺めています」というメッセージを送ってくれた人もいた。

### 2. 支援される側（被災者側）に見えた可能性

自分の家も家族も濁流に流され、全てを失いながらも生きながらえた人は、自分の生まれ育った町で生きることにも罪悪感や絶望感を覚えて、他の地域に移住することもある。一方で、更地と化した場所を離れられず、長く仮設住宅暮らしをしている人も多い。東日本大震災から3年経過した頃に筆者が傾聴ボランティアで訪れた高齢の男性は、筆者の帰り際に「どうか忘れないでください！助けてください！」と泣きながら懇願する方もいた。何年も悲壮感や絶望感に襲われ続けている人は、筆者のような「よそ者」の訪問を非常に歓迎してくれた。無償でたくさんの料理を振る舞ってくれたり、災害の爪跡から残された文化的な遺産まで、様々な場所を案内してくれたりした。このようななりふり構わない歓迎は、訪問者の心を激しく揺さぶり、複雑ながらも大切な思い出となり、その地を離れた瞬間に、すでに「また来たい」という思いにさせてくれた。筆者を歓迎してくれた人に聞くと、「絶望の中で人の優しさや温かさに触れ、きっと自分も少しは人に優しく、温かくなりたいと思ったに違いない」という回答もあった。

また、災害で全てを失い、ゼロやマイナスとなった状況だからこそ、そこから這い上がろうとする力が湧き、這い上がろうとする者同士が固い結束力で結ばれることもある。仮設商店街を盛り上げたり、何も無くなった町にいかにしてたくさんの人の足を運ばせるか、毎日アイデアを出し合ったりすることもある。結城（2014）は災害による絶望の物語の中にいる被災者が、「絶望」と対峙しながら、その中から「希望」と呼ぶことのできる「光」を探し求めてしか生きていけない存在となる可能性を指

摘している。災害福祉に携わる者にとって、このような「絶望の物語を希望の物語に書きかえる作業」を目の当たりにする機会は、一般的な状況下よりも多いと言える。

### 3. 災害福祉に携わりながら考える地域活性化の手がかり

2013年、第1回シリコンバンド大作戦(表2)で全国から応募してきたシリコンバンド購入希望者のうち約350名に「新見市を知っていますか」とアンケートを取った時、96.5%が「知らない」と答えた。また、「新見市のイメージはどのようなものですか」に対しては、ほぼ全員が「わからない」、「イメージはない」という回答であった。筆者はこれらの回答を得て、新見市には大きな可能性が残されていると考えた。新見市に対して何らかの悪いイメージが先行している場合、それを払拭する作業から入らなければならない。しかし、「知らない」、「イメージはない」という状況は、そこから良いイメージを持っていただく良い機会であると考えられたからである。先述の通り、寄付協力者には必ず手書きのお礼状を送り、復興支援活動には必ず筆者の所属する大学名の入ったTシャツを着用し、「これはどこにある大学ですか」、「この大学は何とお読みするのですか」という質問に丁寧に答えさせていただいた。また、寄付支援活動でのグッズ販売では、郵送の際に送り主となる筆者の住所の「新見」には「にいま」と必ずふり仮名を振り、このやりとりを契機に覚えていただくように努めた。その実践を丁寧に継続していると、徐々に「大学の名前が入ったTシャツはありますか」と問い合わせが来るようになっていった。すなわち、最初は新見市や大学の名前に何の印象も無い人ほど、丁寧に、誠実に対応することによって、プラスのイメージをそこに付与し、新たな価値をそこに見出し始めるようになる。

残念なことに、災害福祉活動は無料奉仕的な部分が大半を占めるため、「タダ働きは損」と考えられ、ボランティアはしないという人も多い。あるいは、被災者が他所からの訪問者を熱烈に歓迎し、無償に近い状態で感動するほど贅沢な食事を振る舞うことは、貴重なお金を失う行為と考えることもできる。しかし、先述の通り、我々は、損をしてまで自分のことを考えてくれる相手の熱意にほだされ、人間的に惹かれていくことがある。そして、再びその地に舞い戻るのである。

ここで災害福祉の経験を通して考えた「地域活性化の手がかり」に対するひとつの方向性を提示するとすれば、「はたしてこれまで我々は、他所からこの町に訪問した人を、感動していただけるほど熱烈に歓迎してきたであろうか」、「はたして私たちは、この町の利益について長期的に捉えてきたであろうか」という振り返りが必要ではないかということになる。町全体が訪問者を歓迎し、その訪問者をその町やその町で暮らす人たちのファンにし、

その町へのリピーターにし、時には困っている時に手を差し伸べてくれたりするサポーターになっていただく。つまり、人を惹きつける町にするためには、魅力的な楽しい場所を作ったり、魅力的な美味しい物を用意したりすることも大切であるが、同時にそこに住む人間が一度会ったら忘れることができないような魅力的な人物になれば、たとえその町に名所や名産品がひとつも無かったとしても、その町の人たちに会いに来てくれるのではないだろうか。

実際、新見市には千屋牛や哲多のワインといった誇るべきA級グルメが存在する。しかし、新見市以外にも全国に美味しい牛肉やワインは存在するのも事実である。「どうしても千屋牛を食べたい」、「哲多のワインを飲みたい」と、多くの競争の中から新見市の名産品を選択させるためには、「新見市のあの人たちに会いに行き、そこで食べたい(飲みたい)」と思わせることも大切であると考える。そして、新見市民の誠実な人柄はそれを可能とするものであり、本仮説が決定的外れな提示ではないと筆者は考える。今後は、この仮説を具体的に実証していくための実践を、新見市民と共に推進していきたい。

### 注

- 1) 西尾(2010)は、「災害福祉とは、災害を契機として生活困難に直面する被災者とくに災害時要援護者の生命、生活、尊厳を守るため、災害時要援護者のニーズをあらかじめ的確に把握し、災害からの救護・生活支援・生活再建に対し、効果的な援助を組織化する公私の援助活動である」と定義している。
- 2) 東日本大震災復興支援活動を継続するボランティア団体への支援金を集める目的で、大学の許可を取り「新見公立大学・短期大学」の名前が入ったチャリティTシャツを製作・販売した企画。
- 3) 東日本大震災からの復興を祈願したメッセージと、筆者研究室名を印刷したシリコンバンド(シリコン素材のリストバンド)を制作・販売し、その売上を被災地の支援団体に支援金として寄付した企画。プロミュージシャンとのコラボレーションによって、宣伝および販売をおこなった。
- 4) 未使用の冬用靴下を広く募集し、東日本大震災以後に仮設住宅で生活を送っている方々へ寄付した企画。音楽番組専門チャンネルでの報道もあったため、日本全国で広くこの活動が認知された。
- 5) 東北被災地のお米と本学所在地の新見市の野菜を使用して作ったカレーライスを販売し、その売上を被災地の支援団体に支援金として寄付した企画。
- 6) プロアーティストから無償提供を受けたデザインのステッカーと缶バッジを販売し、売上を福島県の幼稚

- 園にペットボトルの飲料水を届けている団体に支援金として寄付した企画。
- 7) 筆者が本学大学祭で地域貢献のために開催している駄菓子屋模擬店の売上を、東北被災地の小学校新入生への文具購入費用支援金として寄付した企画。
  - 8) 被災地支援活動をおこなうNPOとの共同企画。新見市民や本学学生が東北の復興祈願のメッセージを書いた青い鯉のぼりを、子どもの日に被災地の上空に掲げ、震災で亡くなった子どもを弔うと同時に、全国の子どもの未来が平和であることを祈念した企画。
  - 9) 東北被災地と本学所在地の新見市で、市民に復興祈願や各々の願い事を書いてもらった短冊を、七夕に両方の地で飾って互いの交流を図った企画。
  - 10) 東北被災地において駄菓子屋模擬店を開催し、被災地の子どもたちとの交流を図った企画。
  - 11) 福島第一原発事故の影響を受けた町の幼稚園に、全国から寄付で集まった飲料水を届けているボランティア団体を援助協力した企画。この活動の様子がプロミュージシャンのドキュメンタリーDVDにも収録されたため、広く認知されるにいたった。
  - 12) 東北被災地でボランティア活動を継続する格闘技チームとの共同でおこなったネパール中部地震募金活動。
  - 13) 東北被災地の保育所でのお絵かき教室に合わせ、新見市民や本学学生から無償提供されたクレヨンとお絵

かき帳を寄付した企画。お絵かき教室の講師を人気漫画家が担当したため、この活動が全国で広く認知された。

- 14) 市民から無償提供された未使用のタオルを、東日本豪雨災害の被災地の社会福祉協議会に寄付した企画。
- 15) プロミュージシャンと共同でおこなった東日本豪雨災害募金活動。
- 16) 例えば、埼玉県川口市。

## 文献

- 西尾雄吾：災害福祉の概念，災害福祉とは何か－生活支援体制の構築に向けて，ミネルヴァ書房，8，2010。
- 八尋茂樹，難波正義：地域貢献と東日本大震災支援－中国地方の山間部にある小短期大学から－地域密着型および全国展開型の二種類の情報発信の組み合わせによる地域貢献の試み，文部科学教育通信，340，18-21，2014。
- 山崎敏範，ブンケ・ホルスト：手がき文書における感性的情報処理，電子通信学会技術研究報告，教育工学，94(23)，117-122，1994。
- 結城俊哉：被災当事者の「生活経験の語り」に関するレジリエンスの構成要件の検討，立教大学コミュニティ福祉研究所紀要，2，95-113，2014。